

W. B. Yeats の “A Man Young and Old” における “Oedipus at Colonus” 引用の意図

永 田 節 子*

W. B. Yeats's Intention of Quoting Sophocles' "Oedipus at Colonus" in "A Man Young and Old"

Setsuko Nagata

要旨：W. B. イエイツはソフォクレス劇「コロノスのオイデプス」に関心を持っており、その戯曲のコーラスの部分を用いて彼自身の詩を創作した。彼はその詩を、アイルランドがイギリスから独立後内戦が続く状況のなかで、既に仕上げていた 10 篇からなる連作 “A Man Young and Old” の最後に付加えた。何故イエイツは第 11 編目となる作品 “From ‘Oedipus at Colonus’” を “A Man Young and Old” の最後に付け加えようとしたのであろうか。この論文は、イエイツがソポクレスの「コロノスのオイデプス」を引用して創作した作品が、ソポクレスの原作とどのような相違がみられるのかという観点から、イエイツの “A Man Young and Old” 創作の意図を探るものである。

Abstract : After Ireland's independence from England, civil war continued in Ireland. Being in such a situation, W. B. Yeats was interested in Sophocles' "Oedipus at Colonus." He wrote a poem by quoting a part of its dramatic chorus. He added the poem, "From 'Oedipus at Colonus,'" at the end of "A Man Young and Old." In this thesis, the reason why he added "From 'Oedipus at Colonus'" at the end of "A Man Young and Old" is analyzed from the point of view of the difference between Sophocles' "Oedipus at Colonus" and Yeats's "From 'Oedipus at Colonus.'"

Key words : W. B. Yeats イエイツ “A Man Young and Old” 「若くて年老いた男」 Sophocles ソフォクレス “Oedipus at Colonus” 「コロノスのオイデプス」

“A Man Young and Old” は 11 編の作品から構成されているが、この連作を構成する作品は最初、現在の連作の第 1 編から第 4 編までは “Four Songs from the Young Countryman” を、第 6 編から第 8 編までと第 10 編は “More Songs of an Old Countryman” を、さらに第 5 編と第 9 編は “Two Songs from the Old Countryman” を

構成していたのである¹⁾。この 10 編の作品は 1928 年に詩集 *The Tower* が出版される際に “A Man Young and Old” として再構成されることになった²⁾。1927 年に作られた “From ‘Oedipus at Colonus’”³⁾ は 1933 年に *The Tower* が出版される際に連作の第 11 編目の作品として付け加えられて⁴⁾、“A Man Young and Old”

*関西福祉科学大学健康福祉学部 教授

が完成することになったのである。

イエイツはこのように 11 編の詩からなる “A Man Young and Old” を創作するにあたって、第 11 編目となる作品 “From ‘Oedipus at Colonus’” を何故付け加えようとしたのであろうか。本論では、イエイツがソポクレスの「コロノスのオイディプス」を引用して創作した第 11 編が、ソポクレスの原作とどのような相違がみられるのかという観点から、イエイツが “A Man Young and Old” を創作した意図を探ることにしたい。

さて、“A Man Young and Old” の第 11 編である “From ‘Oedipus at Colonus’” が第 10 編までの作品とどのような関係を持っているのか、連作においてどのような役割を果たしているのかということを考えていくにあたって、連作として構成されることになった第 10 編までの作品に一貫するイメージをみておくことにしたい。

“A Man Young and Old” 第 1 編から第 10 編までの作品は、第 3 編を除いてすべて語り手が過去を振り返って語るという形式をとっているけれども、これらの作品は個人的な感情が描かれているわけではない。それぞれの作品が連作として構成される以前は、イエイツがモード・ゴン等への想いを振り返って創作されたという一面もあったということは考えられる。しかしながら、連作として作品が構成された時点において、“A Man Young and Old” というタイトルが示すとおり、どの作品においても語り手は若い男でもありまた老人でもあるというような、地上世界の誰とでも入れ替わることができる存在に単純化されることになるのである。

イエイツはこの連作において、moon や stone のイメージを繰り返し使用している。“A Man Young and Old” という連作は、3 つの作品が再編成されて出来上がったことから、moon や stone の作り上げるイメージが作品ごとにたえず塗り替えられていくことに不思議はない。し

かしながら、イエイツの創作意図が繰り返し使用されている moon や stone のイメージに映し出されているのである。そこでまず始めに、第 1 編、第 2 編、第 7 編、第 10 編において moon や stone というイメージがどのように描かれているかをみておくことにしたい。

moon と stone のイメージについて

第 1 編 “First Love” において、イエイツは語り手が想いを寄せても手の届かぬ女を空の月 (sailing moon) と喩え、その女の心を石 (stone) の心と喩えるのである。第 2 編 “Human Dignity” では女への届かぬ想いで苦しむ男が木の下で石のように横になると描かれている。男は天上の月のように手の届かぬ女 (moon) に対して地上に転がる石 (stone) として描かれ、天と地が moon と stone というイメージの対比によって描かれている。

さて、moon と stone のイメージは第 7 編 “The Friends of his Youth” においても取上げられており、ここでは月の状態は pot-bellied という表現によって描かれている。

VII

The Friends of his Youth

Laughter not time destroyed my voice
And put that crack in it,
And when the moon's pot-bellied
I get a laughing fit,
For that old Madge comes down the lane,
A stone upon her breast,
And a cloak wrapped about the stone,
And she can get no rest
With singing hush and hush-a-bye ;
She that has been wild
And barren as a breaking wave
Thinks that the stone's a child.

. . .

(p. 252)

語り手は月が太鼓腹になったと喩えられる頃

に、年老いた友人が石 (stone) を赤ん坊と違ってあやし、子守唄を唄いながらやってくるので笑いの発作にとられるのである。石を赤ん坊とみなしてあやす友人の状況は wild と喩えられている。

ここで描かれる月のイメージは、男があこがれる女性を地上世界からは手の届かぬ世界、天上世界の月に喩えるという第1編と第2編において使われたイメージを利用しつつ、月を太鼓腹に喩えた詩句 when the moon's pot-bellied によって、月を俗なる地上の世界と関係を持たせたイメージとして作り変えるのである。この詩にみられる語り手の笑いと moon や stone のイメージの背後には、作者が天と地を強引に関連を持たせようとしつつも相反する世界を関係づけ新しい世界を作り上げることの困難さを認識し、このような状況を客観的に眺める視点が存在する。

第10編は第7編で描かれていた stone のイメージがそのまま引き継がれ、イエイツの地上世界と天上世界との関係への関心がみられる。

His Wildness

O bid me mount and sail up there
Amid the cloudy wrack,
For Peg and Meg and Paris' love
That had so straight a back,
Are gone away, and some that stay
Have changed their silk for sack.

Were I but there and none to hear
I'd have a peacock cry,
For that is natural to a man
That lives in memory,
Being all alone I'd nurse a stone
And sing it lullaby. (p. 254)

語り手は友人達と過ごした過去を振り返り、天空高く飛翔したいという想いを抱いている。この想いはこの世とは異なる世界、there とい

う言葉で描かれる天空のかなたへのあこがれとして示されるのである。第10編における Were I but there and none to hear / I'd have a peacock cry, という詩句は、語り手が天空のかなたで理想とするものを手に入れたいという願いを描いている。

イエイツは1914年に5月に *Poetry* に掲載された “The Peacock”⁵⁾ において、肉眼ではなくビジョンを見ることのできる心眼を持ち偉大な作品を作る芸術家にとって豊かさとは何かというテーマ、What's riches to him / That has made a great peacock / With the pride of his eye? (p. 135) を取り上げている。この問いに対して、この詩は孔雀の羽を1枚1枚と付け加えていくこと、つまり芸術作品を作り上げていくことが喜びであると締めくくられるのであり、孔雀はビジョンをみることのできる芸術家が作り上げようとする理想を象徴するものとして描かれているのである。“A Man Young and Old” 第10編の “His Wildness” において描かれる孔雀のイメージも同様に、ビジョンをみることのできる芸術家であると自負するイエイツが作り上げようとする理想を象徴すると同時に、彼が *A Vision* という評論で述べているようなユノーの孔雀が重ねあわされているのである。ユノーの孔雀の鳴き声というのは一つの文明が終わりに近づくことを啓示する⁶⁾ のであり、I'd have a peacock cry という詩句は新しい文明の誕生への願いが秘められているのである。

しかしながら、語り手はそのような理想とするものを手に入れることは不可能であるということも認識しているのである。語り手は第7編では石を赤ん坊としてあやそうとする友人を笑っていたけれども、第10編では彼自身の置かれている状況を認識して、自嘲するように彼も友人と同じように石を赤ん坊としてあやそうと語るのである。このように描かれる語り手の状況というのは、第10編のタイトルにもなっているように wild と喩えられている。

ところで、第10編のタイトル “His Wild-

ness” はこのような語り手の状況を反映するだけでなく、作者が天と地という相反する世界に関係を持たせ新しい次元の世界を想像力によって作り上げようと苦闘しつつ、その困難さを認識している状況にあることをも映し出しているのである。このように創作活動において wild と喩えられる状況は 1912 年に出版された *The Green Helmet and Other Poems*⁷⁾ という詩集のなかの “The Cold Heaven” という作品においても取り扱われている。

The Cold Heaven

SUDDENLY I saw the cold and rock-
delighting heaven
That seemed as though ice burned and was
but the more ice.
And thereupon imagination and heart were
driven
So wild that every casual thought of that and
this
Vanished, and left but memories, that should
be out of season
With the hot blood of youth, of love crossed
long ago ;
And I took all the blame out of all sense and
reason,
Until I cried and trembled and rocked to and
fro,
Riddled with light. . . . (p. 140)

“The Cold Heaven” において、心とイマジネーションが wild となる状況が描かれており、そのような状況のなかで、語り手である「私」は突然ミヤマガラスが飛ぶ天空を見たと言語するのである。鳥が喜びに溢れて飛ぶ冷たい天空 (the Cold Heaven) は、氷が燃えれば燃えるほど凍っていくと喩えられている。

ところで、イエイツは評論「シェリーの詩の哲学」のなかでシェリーがホメロスに関心をもち、ホメロスの描く洞窟には、生殖によってこ

の世に到る門と死によって神々のもとへと上昇する門との二つの門があり、“cold” はこの世に生命を生じさせ、“heat” は神々のあいだに生命を生じさせる⁸⁾と述べていることに注目している。“The Cold Heaven” という作品はこのような考え方の影響がみられるのであり、イエイツは “The Cold Heaven” において氷 (“cold”) と炎 (“heat”) とが一つとなった天空 (the Cold Heaven) を生と死を超えた世界として描き出そうとするのである。“A Man Young and Old” 第 10 編の “His Wildness” において、語り手が青春の記憶を振り返り wild と喩えられる状況のなかで望む孔雀の鳴き声の響く天空 (there と呼ばれるところ) は、天と地、この世とあの世が新しい関係を作り上げる理想の時間空間であり、“The Cold Heaven” という作品において描かれる氷と炎とが一つになり、より一層凍っていく冷たい天空 (the Cold Heaven) に相当するのである。

“A Man Young and Old” の語り手の記憶は、過去の恋人との記憶に限定されて連作の枠組みを作っているが、“The Cold Heaven” という作品も、恋の思い出と関連した過去の女友達との記憶を取り上げている。このような記憶との関わりのなかで理想の世界を求めるという作品構成においても、“The Cold Heaven” と “A Man Young and Old” は共通性を持っているのである。

“A Man Young and Old” において、孔雀の鳴き声の響く天空 (there とよばれるところ) が描かれることも、月と石のイメージが取りあげられ、作品が過去の女友達との記憶に絞られて構成されることも、更に先取りしてしまうならば、第 11 編でオイディプスが冥界で「霊」となって生きることを示唆する場面が引用され、結婚の床と死の床とを重ね合わせたイメージが作られることもすべて、この世とあの世を超えた世界、生と死を超えて新たに生みだされるものを追求しようとするイエイツの意図と関係しているのである。

「コロノスのオイディプス」引用におけるイエイツ独自の詩句「思い出すことをやめよ」について

天と地、この世とあの世とを越えた理想の時間空間を求める作者の想いは、“A Man Young and Old” 第 10 編において啓示のように示される新しい文明の誕生を待つことに収斂されることになる。そこで、第 11 編というのは第 10 編までとどのような関係を持つのか、連作においてどのような役割を果たすのかという観点から、イエイツがソポクレスを引用する際に原作にどのような工夫をこらしたのかということを考えることにしたい。

第 11 編においてイエイツはソポクレスの「コロノスのオイディプス」を引用することによって、第 10 編までのこの世とあの世との関わりというテーマに結論を出そうとするのであり、第 10 編までのような語り手が過去を振り返るといった描き方をやめ、語り手を登場させないのである。イエイツは連作“A Man Young and Old” 第 11 編に、コロノスの地にいるオイディプスがこれから冥界へと向かう直前のコロスの唄を引用することにより、この世とあの世、生と死の世界を同時に眺める視点を導入するのである。

コロス
ほどよい年では飽き足らず、
もっと長い命を望む人は、
わたしの目には、
明らかに愚か者だ。
長い日は多くのことを喜びよりも苦しみに
近づけ、
長生きをしすぎた者には、
楽しみはどこにも見当たらない。
救いの主はすべての者に最後には等しく現
われる。
ハデスの運命が、結婚のことほぎの歌もな
く、

豎琴の楽も、踊りも伴わずに、現われる
時、
そうだ、最後には死だ。
この世に生を享けないのが、
すべてにまして、いちばんよいこと、
生まれたからには、来たところ、
そこへ速やかに赴くのが、次にいちばんよ
いことだ。
青春が軽薄な愚考とともに過ぎ去れば、
どんな苦の鞭をまぬかれえようぞ。
どんな苦悩が襲わないでいようぞ。
嫉妬、内紛、争い、合戦、
殺人。かの憎むべき、力なき、無慈悲な、
友なき老年がついに彼を
自分のものとし、禍いの中のあるとしある
禍いが彼に宿る。⁹⁾

ここに引用したソポクレスの「コロノスのオイディプス」におけるコロスの唄（高津春繁訳）と、イエイツがソポクレスのこの場面の唄を引用して作り上げた連作“A Man Young and Old” の第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” は、似ているようでかなり異なっているのである。“A Man Young and Old” の第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” と、ソポクレスの「コロノスのオイディプス」とが大きく異なるのは、「思い出すことをやめよ。」というイエイツの詩句にみられるような表現が原作のソポクレスにはないことである。次に、“A Man Young and Old” 第 11 編の “From ‘Oedipus at Colonus’” を引用する。

XI

From ‘Oedipus at Colonus’
Endure what life God gives and ask no longer
span ;
Cease to remember the delights of youth,
travel-wearied aged man ;
Delight becomes death-longing if all longing
else be vain.

Even from that delight memory treasures so,
Death, despair, division of families, all entan-
gements of mankind grow,
As that old wandering beggar and these God-
hated children know.

In the long echoing street the laughing danc-
ers throng,
The bride is carried to the bridegroom's
chamber through torchlight and tumultuous
song ;
I celebrate the silent kiss that ends short life
or long.

Never to have lived is best, ancient writers
say ;
Never to have drawn the breath of life, never
to have looked into the eye of day :
The second best's a gay goodnight and
quickly turn away. (p. 255)

“From ‘Oedipus at Colonus’” 第 1 連の「旅に
疲れた老人よ、若い頃の楽しみを思い出すのを
やめよ。」(Cease to remember the delights of
youth, travel-wearied aged man) という詩句にみ
られる「旅に疲れた老人」という呼びかけは、
第 10 連までの女への想いをたどる語り手への
呼びかけともなるように構成されているのであ
る。イエイツは“A Man Young and Old”にお
いて天と地、この世とあの世との関わりをテー
マとしてきた連作としての一貫性を持たせる為
に、第 11 編においてオイディプスが地上の世
界から冥界へと向かう、その二つの世界の境界
という時間空間に焦点をあて、生と死を同時
に眺める視点を作り理想の時間空間を追求しよ
うとするのである。

ところで、Jebb の翻訳を利用してイエイツ
が創作した劇作品 “Sophocles’ Oedipus at
Colonus” がソポクレスの原作と異なるのは、
Jebb の翻訳ではオイディプスが any resting

place, whether on profane ground or by the grove
of the gods を求めるところを、イエイツの場合
オイディプスがアンチゴネーに some place, some
sacred place へ導いてくれるように頼む¹⁰⁾ こと
である。イエイツの劇作品 “Sophocles’ Oedi-
pus at Colonus” の場合、オイディプスが導か
れるのは神聖な場所ではなくてはならないと描
かれるのであり、このような変更がなされるの
も、イエイツが彼独自の理想の世界を求めて
劇作をおこなっているからなのである。彼の劇
作におけるオイディプスが導かれるべき神聖
な場所への関心は、“A Man Young and Old”
の第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’”
における生と死を超えた理想の場所を求めると
いう試みと関係を持っているのである。

ソポクレス劇「コロノスのオイディプス」に
おけるオイディプスの登場する最終場面では、
オイディプスが雷鳴の轟きとともにゼウスの
招きを認め、「自分のこの地における眠りはア
テナイの祝福となるであろう。」と告げ歩み
去る¹¹⁾。イエイツは“A Man Young and Old”
の第 11 編に神が自己の犠牲者として認める
オイディプスと和解しようとする¹²⁾最終場
面へと続くコロスの唄を引用することにより、
この世とあの世への新たな視点を作り上げ、
第 10 編までの語り手の地上世界における
記憶を浄化する効果を作り上げようとする
のである。このようなイエイツの意図は、
ソポクレスの原作にはない「若い頃の喜び
を思い出すのをやめよ。」(Cease to remem-
ber the delights of youth, travel-wearied
old man) というイエイツ独自の詩句を
作り上げることになるのである。第 11 編
ではどんなに楽しい記憶であっても、記憶
からは死、絶望、家族分裂、人類間の混
乱しか生まれてはこないものと規定される
ことになる。連作“A Man Young and Old”
第 10 編までの詩において若くて年老いた
男、つまり地上の誰とでも置き換えること
が可能で存在である語り手が女への想いを
めぐって地上世界での過去を振り返る
記憶は、人間に共通する記憶とし

て一般化されることになるのであり、第 11 編は第 10 編までで描かれた地上の人間の記憶を破壊的な力をもたらしものであると否定し浄化するように作られているのである。第 11 編になると、記憶のなかに生きるということは地上世界へ執着することであると同時に、地上世界に破壊をもたらしことになるとして否定されるのである。このような記憶に関する表現もソポクレスの原作にはないものであり、イエイツ独自のものである。

このように、イエイツは第 11 編においてソポクレスの作品を引用して生と死の世界を眺める視点を作り上げようとするのであるが、このような視点へのイエイツの関心はソポクレスの作品を引用しつつも、原作にはない結婚の床と死の床とが等しい関係にあることを描くイメージを作り上げることにもなるのである。

「コロノスのオイディプス」引用におけるイエイツ独自の結婚の床と死の床のイメージについて

イエイツは第 11 編の第 3 連においてソポクレスの原作を変更して、死の床と結婚の床とが重なり合う彼独自のイメージを作り上げようとするのであるが、このようなイメージへの彼の関心は、1934 年に創作された “Supernatural Songs” の第 1 編 “Ribb at the Tomb of Baile and Aillinn” にもみられる。この作品では古代アイルランドの二人の恋人ボイラとアイリーンが、それぞれキリスト教を表すと同時に生を象徴するりんごの木と、異教をあらわすと同時に死を象徴するイチイの木の下に埋葬され、悲恋に終わった二人の愛が死後結ばれてキリスト教と異教、生と死が一つとなり夜空に明るい光の炎を作ると描かれるのである¹³⁾。

また、イエイツが結婚の床と死の床とが重なり合うイメージを作りあげようとしたことには、彼の十七世紀の形而上詩人への関心が影響している。イエイツはジョン・ダンの “A Nocturnal upon S. Lucied day, Being the shortest

day” を引用して 1926 年に創作した “A Woman Young and Old” 第 6 編 “Chosen”¹⁴⁾ において、恋人への想いがかなわず死後の天上世界での結婚を夢想する男が、錬金術によって死後この世にはない純化された存在となり、この世ではなくてあの世で霊と霊とがむすびつくことを願うことを取上げているのである。

イエイツは “A Man Young and Old” と “A Woman Young and Old” とを関連を持たせながら、生と死が交錯する時間空間を表現する彼独自のイメージを作り上げようとしているのであり、“A Man Young and Old” 第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” と、“A Woman Young and Old” 第 11 編 “From the ‘Antigone’” とは互いに関連を持って構成されている。イエイツは “From the ‘Antigone’” においては Oedipus’ child / Descends into the loveless dust. (p. 315) という詩句によって、アンティゴネーが生きながら砂に埋もれていくという原作にはないイメージを作り上げ、生と死の重なり合う時間空間を描き出そうとするのであるが、同様の試みとして、“A Man Young and Old” の第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” においても、結婚の床と死の床とが一つとなるイメージを作り上げ、生が死のプロセスを経て新たなものを生み出す可能性がたたえられることになる。そしてその生と死のプロセスは、この世から冥界へ向かい新たな存在となるオイディプスにもあてはまるのである。

イエイツの神話追求の試みにおけるオイディプスの役割

生と死、この世とあの世、天と地との関わりへのイエイツの関心は、コロノスの地において冥界の霊となるオイディプスにも向けられるのである。イエイツは Richard Jebb 訳や Paul Masquery 訳を利用して¹⁵⁾ソポクレスの多くの作品のなかでオイディプスにゆかりのある “Sophocles’ King Oedipus” と “Sophocles’ Oedipus at Colonus” を創作しアベイ座で上演している。

“Sophocles’ King Oedipus” の上演が成功であったことはイエイツの手紙からもうかがわれ、彼は “Sophocles’ King Oedipus” 上演の初日から 11 日目の 1926 年 12 月 18 日には “Sophocles’ Oedipus at Colonus” を書き始めているのである。イエイツは 1927 年 1 月 6 日のオリビア・シェイクスピア宛てた手紙のなかで、現在執筆中の “Sophocles’ Oedipus at Colonus” に関して、原作に忠実に訳された翻訳よりも更に一層イエイツ独自のものを創作したいという意向を述べ、彼の作品を当時のアイルランドに適したものと作り上げようとしたのである¹⁶⁾。

イエイツは劇作ばかりでなく、自身の詩を創作する際にもソポクレスの「コロノスのオイディプス」を引用しているのであり、ストーリーとコロノスという土地、そしてオイディプスという存在に強い関心を持っているのである。第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” において描かれるコロノスの地は、地上世界における破壊とは無縁なところを象徴するものとして取り上げられている。コロノスの地というのはギリシア神話と関係が深いところであり、アテーナーとポセイドンとがアッティカの地を争い、おのおのが最良の賜物を与える約束をし、女神が勝利しアッティカの地は彼女のものとなったとされている。女神アテーナーは国家の守護神ともなっており¹⁷⁾、イエイツはアテーナーの見守るコロノスの地を自国アイルランドに重ねて作品に取り上げ^{18, 19)}、当時のアイルランドの人々に、誰の手によっても破壊されることのない理想の世界を、コロノスの地というイメージとして提示しようとしたのである。

イエイツは、ソポクレスがペロポネソス戦争の終わりが近づきアテナイ崩壊の日の直前に「コロノスのオイディプス」を創作して故郷コロノスの地を称揚した詩人としての姿勢に、同じ詩人として関心を払っているのである。イエイツがギリシア悲劇の作家のなかでソポクレスに、そしてソポクレスの作品のなかでも「コロノスのオイディプス」に惹かれた理由の一つと

して、ソポクレスが最晩年の作品において故郷であるアテナイの地を理想の地として描き上げる姿勢が挙げられるのであり、イエイツも 1922 年の独立後内戦を繰り返しているアイルランドにおいて、破壊的な力を持つものへの執着から人々が解き放たれる理想の世界を描こうとしたのである。

ところで、イエイツはオイディプスが死すべき場所として神託で示されているコロノスの地で祖国をまもるべき「霊」となり、地下でエウメニデス女神たちと祀りを分つ^{ハロス}半神²⁰⁾となるオイディプスに関心を持っている。イエイツがコロノスの地で冥界へと向かい「霊」となる存在であるオイディプスを引用した作品 “From ‘Oedipus at Colonus’” を “A Man Young and Old” の第 11 編に配置したのは、彼独自の神話を作ろうとするからなのである。イエイツはアイルランドという国にまつわる神話を作る試みにおいて、オイディプスをキリストに匹敵する存在として、つまり歴史を 2000 年単位で新たに作る存在として必要とするのである。イエイツはある本が完成した際には新しい神話を公表することになるだろうと述べて、その本の序文をエズラ・パウンドに送るとした *Vision* という評論のなかで、オイディプスを十字架にかけられたキリストと比較して考えたいと述べているのである。つまり、イエイツはキリストとオイディプスを一つの天秤の二つの皿だと仮定して、2 千年の周期で変化がおきるとするとどうだろうか²¹⁾と、独自の神話を作り上げようとしたのである。

イエイツは “A Man Young and Old” という連作の最後に第 11 編として “From ‘Oedipus at Colonus’” を付け加えて連作を完成することによって、人間が地上世界の記憶に執着することが破壊的な力をもたらすことを描き出し、2 千年の周期で新しい歴史が誕生するという神話を作り上げようとしたのである。彼は独立後アイルランドで人々が破壊的な力を求め内戦にくれ

る現状において求められる理想の世界を、連作を完成させることによって描き出そうとしたのである。

イエイツは 1927 年から 1928 年にかけて創作した “A Woman Young and Old” の第 11 編 “From the ‘Antigone’”²²⁾ において、カオスにおける破壊から創造へと向かう兆候を、そして人々が新しい歴史の誕生を待つ状況を描こうとした²³⁾ ののであるが、この試みと同様に、彼は “A Man Young and Old” の第 11 編 “From ‘Oedipus at Colonus’” においても、誰の手によっても破壊されることのない理想の世界を模索し、2 千年単位で新しくなる歴史が今まさに誕生することを暗示することのできる神話を作り上げようとしたのである。

引用した作品はすべて W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats*, London: Macmillan 1933 による。

引用文献

- 1) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats: The Poems*, London: J. M. Dent and Sons Ltd., 1990, p. 676.
- 2) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, London: Macmillan, 1968, p. 309.
- 3) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 312.
- 4) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats: The Poems*, p. 676.
- 5) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 141.
- 6) W. B. Yeats, *A Vision*, New York: Macmillan, 1956, p. 268.
- 7) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 146.
- 8) W. B. Yeats, *Essays and Introductions*, London: Macmillan, 1961, p. 83.
- 9) 高津春繁 ソポクレス ギリシア悲劇Ⅱ 東京: ちくま文庫 1989 年 514-515 頁
- 10) Kelly Younger, *Irish Adaptations of Greek Tragedies: Dionysus in Ireland*, Lanepfer: The Edwin Mellen Press, 2001, pp. 54-55.
- 11) 高津春繁 ソポクレス ギリシア悲劇Ⅱ 東京: ちくま文庫 1989 年 527-529 頁
- 12) 高津春繁 ソポクレス ギリシア悲劇Ⅱ 553 頁
- 13) Ed., Daniel Albright, *W. B. Yeats: The Poems*, p. 759.
- 14) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 394.
- 15) David R. Clark, *Yeats At Songs & Choruses*, Amherst: The University of Massachusetts Press, 1983, p. 137.
- 16) Kelly Younger, *Irish Adaptations of Greek Tragedies: Dionysus in Ireland*, p. 50.
- 17) 高津春繁 ギリシア・ローマ神話辞典 東京: 岩波書店 1960 年 21 頁
- 18) イエイツは、‘Sophocles’ “Oedipus at Colonus” をアペイ座の舞台において準備する際、「ソポクレスにおける復讐の女神たちの森をアイルランドの森と考えた。」と述べている。Ed., Russell K. Alspach, *The Variorum Edition of the Plays of W. B. Yeats*, London: Macmillan, 1966, p. 899.
- 19) イエイツはソポクレスの翻訳において、舞台をアイルランド国民に理解しやすいように国土を飢饉に襲われたアイルランドにあわせて、疫病 (plague) という言葉を飢饉 (famine) と置き換える工夫をおこなった。Kelly Younger, *Irish Adaptations of Greek Tragedies: Dionysus in Ireland*, p. 43.
- 20) 高津春繁 ソポクレス ギリシア悲劇Ⅱ 554 頁
- 21) W. B. Yeats, *A Vision*, pp. 28-29.
- 22) A Norman Jeffares, *A Commentary on the Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 398.
- 23) 永田節子 “A Woman Young and Old” における引用の構造 大阪: 関西福祉科学大学紀要第 9 号 平成 18 年 153-160 頁

